

## 組織・分野横断型のキリシタン文化研究

Kirishitan culture studies across departmental and disciplinary boundaries

渡邊 顕彦<sup>1</sup>, 松村 茂樹<sup>2</sup>, 小井土 守敏<sup>3</sup>, 黎 静如<sup>4</sup>, 利根川 千枝子<sup>5</sup>, 楠瀬 由夏<sup>6</sup>

Akihiko Watanabe<sup>1</sup>, Shigeki Matsumura<sup>2</sup>, Moritoshi Koido<sup>3</sup>, Jingru, Li<sup>4</sup>, Chieko Tonegawa<sup>5</sup>, and Yuka Kusunose<sup>6</sup>

<sup>1</sup>比較文化学部比較文化学科, <sup>2</sup>文学部コミュニケーション文化学科,

<sup>3</sup>文学部日本文学科, <sup>4</sup>言語文化学専攻博士後期課程国際文化専修,

<sup>5</sup>言語文化学専攻修士課程国際文化専修,

<sup>6</sup>言語文化学専攻修士課程日本文学専修

キーワード: キリシタン文化, 書誌学, 宗教学, 郷土史

Key words: Kirishitan culture, Book history, Religious studies, Local history

### 1. 研究目的

キリシタン文化研究は16～17世紀に日本で行われたカトリック宣教および江戸時代を通じ、明治以降に至るいわゆる「かくれ」信仰, さらに国内のみならず広大なスペイン・ポルトガル帝国を含む世界各地に残る関連記録や記憶の伝承をも対象とする, 極めて分野横断的なものである。キリシタン研究に従来深く関わってきた隣接諸分野としては日本史のみならず日本文学, 西洋史, 西洋文学, 宗教史などがある。また南中国沿岸部から東南アジアに広がっていた華人カトリックコミュニティとかくれキリシタンとの貿易などを通じた交流の可能性も近年指摘されている。

本研究では大妻女子大学内の複数組織に所属する専任教員および大学院生が協力し, それぞれの専門分野(西洋史・西洋文学, 日本史・日本文学, および中国文化史など)の視点からキリシタン史を新たに検討し, 起源においては同一の事象がどのようにして異なる文脈におかれ, 別方向に伝承されてきたのかを明らかにすることを目的とした。

なお本研究の代表者は2014年以降, 戦略的個人研究費や科学研究費を含む学内外の助成を受けてキリシタン研究に関わってきた。代表者の専門分野は古代ギリシャ・ローマの文献を扱ういわゆる西洋古典学であるが, 16～17世紀は東アジア宣教を行ったカトリック教会, 特にイエズス会を通じて日本人が史上初めてラテン語等, 西洋古典伝統に触れた時代である。この時代に, ルネサンス以降西洋のいわゆる人文学者が使うようになった復古的あるいは擬古典的なラテン語を日本人も少数

ではあるが作文できるようになっていたことが確認できている。また16世紀終盤以降, 西洋の人文学者やカトリック系教育現場でも擬古典的な文脈の中に日本情報が組み込まれていったことが様々な文献(出版物, 手稿両方の)証拠より明らかになってきている。

### 2. 研究実施内容

本研究の目玉は8月に行った長崎・平戸・生島現地調査および研修(以下「研修」)であるが, その前準備として5月から7月にかけて, 研究メンバーおよび現地の協力者たちと連絡をとりあい, 日程や研究・研修内容を詰めていった。特に研究メンバーの大学院生(黎, 利根川, 楠瀬)は代表者の授業も受けていたのでその一環としてキリシタンや関係する日本史を検討していき, 教員メンバー(松村, 小井土)とはメールや対面で打ち合わせを続けた。

8月には21日から24日, 3泊4日の研修を行った。この研修には研究メンバーのほか, 研究代表者のゼミ生である学部4年生1名(長谷部由樹)および早稲田大学高等研究所研究員1名(Antonia von Karaisl)も外部から加わった。研究メンバーの松村は残念ながら所要で参加がかなわなかった。

研修初日は羽田で集合し飛行機で長崎に向かった。2日目はチャーターバスで平戸を経由し, 生島の博物館「島の館」に向かった。「島の館」では館長であり, 潜伏キリシタンの民俗学的研究第一人者でいらっしゃる中園成生先生および中村琢学芸員にもご同席いただき, 本研究メンバーおよび外

部参加者が発表するシンポジウムを開催した。

このシンポジウムではまず研究代表者(渡邊)が、キリシタン研究の学際的国際的広がりについて考察した。次に小井土が江戸初期日本のいわゆる「古活字版」にみられるキリシタン版(16世紀末にイエズス会により日本にもたらされた西洋活版印刷技術や印刷機を使った印刷物)の影響の可能性について、次いで楠瀬が排耶蘇系文学にみられるカトリック宣教師のイメージについて発表した。研修に参加できなかった松村の指導を受ける利根川院生は群馬県邑楽町近辺の潜伏キリシタンの痕跡といわれる墓石やほか遺物、関係する古文書などについて、黎は宮崎駿監督のアニメ作品にみられる土着宗教的な要素について、長谷部は学部卒業論文のテーマとしても研究してきた細川ガラシャの日本側と西洋側の記録の相違について、そして von Karaisl は日本の神社や寺に残るいわゆる算額とイエズス会がもたらした西洋系学問受容との関係の可能性について、それぞれ発表を行った。

このように多岐にわたる発表の後、中園館長および中村学芸員からは大変丁寧な、そして時に鋭い指摘やコメントをいただいた。全てをここで列挙することはできないが、利根川院生の発表に関して、これは他にも全国に類例がある、「キリシタンの神話化」ではないかという館長のコメントが特に代表者には印象に残った。潜伏キリシタンの「実像」については中園館長ご自身を初め多くの学者の研究の蓄積があるが、後世、特に近現代に創り出された「神話」の類も多く存在することはおおむね認められている。その文献的口承的記録が圧倒的に多く残る長崎やほか九州各地域に比べ、本州特に関東に関しては、江戸初期までのキリシタン宣教や殉教の記録はあるものの、その後の潜伏コミュニティーに関する研究は根拠が不確実だと評価されるものが多い。ただこれは潜伏キリシタン共同体そのものが、宣教基盤が比較的しっかりしていた長崎周辺とは異なる方向に本州では変化していったと解釈することもできる。本州は長崎近辺より宣教が可能であった年月が短く、かつ共同体がまとめてキリシタン化したのでもなく他地域(主に九州と関西地域)から弾圧の結果離散し流れてきた個々あるいは家族単位の信者(表向き棄教し監視下にあった者たちも含む)が多かったという事情も考慮しなければいけない。いずれにせよキリシタン研究は発展の余地が多いにある、また多数の異なる分野の専門家がこれからも協働

していくべき対象であることを確認できた、実り多いシンポジウムであった。

シンポジウム後は平戸に戻り、一時間ほど松浦史料博物館を見学した。松浦党はかつて平安から戦国時代にかけて水軍で名をはせた集団ということで、軍記を専門とする日本文学科の研究メンバーの解説も時折聞きつつこの史料館を見学することは特に日本史の素養が薄い研究代表者にとって大変勉強になった。

この日はチャーターバスで長崎に帰り、翌日は二十六聖人記念館、長崎歴史文化博物館、興福寺、出島跡などを巡り、元々イエズス会によりその基盤が築かれ、いわゆる鎖国の時代を通しても対外貿易の拠点であった同市の国際色豊かな歴史について認識を深めた。特にイエズス会士でありキリシタン史研究者でもあった結城了悟またの名ディエゴ・パチェコ師(1922-2008)が1962年に創立された二十六聖人記念館では、宮田和夫研究員のご案内により詳しく館内展示物を見学し、加えて代表者と外部参加者の von Karaisl は上階の文書庫も見させていただいた。また同日午後、東明山興福寺を訪れたが、ここでも松尾住職のご案内により境内を見学し、後研究メンバーや外部参加者もまじえて同寺や長崎の歴史についてしばし歓談することができた。後述するが、松尾住職の媽祖信仰についてのお話は代表者にとって今後の研究の方向を考える上で大変示唆に富むものであった。

このように実り多い8月の研修の後、後期は上記研究成果を研究メンバーと共に検討しつつ、本共同研究結果を受けた今後の発展について考えていった。

### 3. まとめと今後の課題

上記の通り本共同研究、特に多くの研究メンバーが参加した研修により、今後の研究の視野は確実に広まった。キリシタン研究が日本史、諸外国史、文学史、思想史、宗教史などを巻き込む学際的・国際的な分野であり、今後の発展の余地が大きいことを、代表者をはじめ研究メンバー全員が確認できた。

特に研究代表者にとっては、並行して進めてきた科研(基盤(C)研究課題番 22K00466「ギリシア神話に回収されるキリシタン:近世擬古典ラテン語文学における日本の受容」)で2023年4~5月に行なったフィリピン研究調査とからめ、キリシタンを通じた日本と東南アジアの関係についてインスピ

レーションを受けることが研修中多々あった。例えば1624年に創建された興福寺は、他複数の長崎の古寺と同じくキリシタン追放後に幕府の後押しのもと、同市の非カトリック化と仏教化を担った中華系の宗教組織であるが、同寺で祀られてきた媽祖はマカオやマニラの華人コミュニティの崇拝も広く集めてきた中国南部の女神であり、諸説あるものの宗教学的に聖母マリアと重なる要素があることがこれまでも指摘されている。マカオでは近世にもイエズス会が媽祖（そもそもマカオの語源そのものが媽閣、媽祖神殿である）崇拝と聖母マリア崇敬の混同の可能性を認識し警戒していたし、フィリピンでも聖母マリア崇敬と媽祖崇拝はしばしばシンクレティズム現象を起こしていたことが先行研究で指摘されている。スペイン植民地としてのフィリピンは16世紀末以降、マカオと並んで日本人キリシタンの避難先でもあったわけで、フィリピンにおける華人と近世日本人コミュニティの接触の可能性は代表者にとって関心のある研究課題である。さらに潜伏時代キリシタンの所有していたマリア観音像であるが、このうち

多くは禁教時代に中国南部で作成され、日本に輸入されたものであることも近年指摘されている。スペイン植民地フィリピン、ポルトガル植民都市マカオを含む南中国沿岸部、長崎を結び、その周辺に潜伏キリシタンも位置していたカトリック（媽祖信仰等中華的・東南アジア的な習合的疑似カトリックも含む）ネットワークはかつて存在していたのだろうか。今後機会を探って調査してみたい。

#### 4. この助成による発表論文等

##### ①学会発表

[1] シンポジウム「組織・分野横断型のキリシタン文化研究」2023年8月22日(火)13:00-15:30, 「島の館」会議室。

##### 付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所の研究助成(K2314)「組織・分野横断型のキリシタン文化研究」(研究代表者:渡邊顕彦)を受けたものです。